

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：19K00403
研究課題名（和文）ポストサフレジズム研究

研究課題名（英文）Postsuffragism Studies

研究代表者

松永 典子（Matsunaga, Noriko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：00579807

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：1990年代以降のフェミニズムは、近年、ポストフェミニズムという分断の用語で説明されている。他方、イギリス文学では伝統的に20世紀前半の文学として議論されてきたモダニズムが空間的・時間的分野横断的に拡張されて研究されている。両者の研究動向を踏まえ、本研究は、拡張するモダニズム研究を再考することによって、20世紀および21世紀のフェミニズムを連続体として記述することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のイギリス文学研究においてはミドルブラウ研究を筆頭にモダニズム文学研究の見直しが盛んである。本研究課題においては、大衆読者に注目するミドルブラウ研究に依拠しつつ、しかし、その枠組みをフェミニズムとともに再考することによって、モダニズム文学と呼ばれる一連の研究の問題点をジェンダーの観点から明らかにした。これによって、イギリス文学文化研究において、ジェンダーの問題系とイギリス文学の問題系を接続させることの重要性を示したという意味で、当該研究の学術的地平の拡大に寄与した。

研究成果の概要（英文）：Feminism since the 1990s has often been described in terms of a discontinuity: postfeminism. In contrast, modernism, which has conventionally been confined to the literature of the early 20th century in the realm of English literature, has been expanded and studied spatially, temporally and vertically. This project aims to explicate the feminist movement in English literature during the 20th and 21st centuries as a continuum, through an examination of the expanding trend in modernist studies.

研究分野：イギリス文学

キーワード：モダニズム フェミニズム ミドルブラウ イギリス文学 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

本課題の研究開始時点において注目したのは、1990年代後半あたりから、現代のフェミニズムの状況を表す postfeminism という概念である。この用語は、論者によって意味するところは異なるものの、いわゆる第二波フェミニズム世代とそれ以降のフェミニズムとの断絶や分断を指す用語として用いられている。本課題の当初にあったのは、イギリス文学研究者として、こうしたフェミニズムの分断状況をどのように理解すれば良いのか、という問いである。

このような問いを念頭に、本課題では、ポストフェミニズム下における女たちの課題として知られる「すべてを持つ(have it all)」に注目した。「すべてをもつ」が意味する具体的内容は漠然としているが、たとえば、ロマンティックコメディなど娯楽映画においては恋と仕事の成就を、現実においては家庭と仕事のワークライフバランスという目標を指す。一見すると、21世紀の女性有償労働者特有の課題に見えるかもしれないが、「すべてを持つ」という言葉は、第二波フェミニズム世代が望んだ男女同一賃金などの延長線上にある課題だったとも考えられる。

現代のフェミニズム状況を上記のように理解したうえで、20世紀前半のイギリスにおけるフェミニズム文学を考えてみようとする本課題において着目したのは、近年イギリス文学において耳目を集めるミドルブラウ研究である。ブラウとは、趣味あるいは教養を意味するが、イギリス文学においては、人々を趣味や教養によってカテゴリー化する概念として用いられている。このブラウという概念に最初に注目したのは20世紀初頭のイギリス知識人たちであった。その背景にあるのが参政権の獲得と新たな読者層の台頭である。イギリスでは、19世紀から1918年、1928年と段階的に選挙権が改正され、普通選挙権が獲得された。20世紀初頭は他方で、ペーパーバックなどの普及によって大衆が新たな読者となった時代でもある。このような状況を議論したのが1920年代の知識人であった。こうした史実に基づき、2000年前後から始まったミドルブラウ研究は、大衆読者層をイギリス文学研究の射程に入れることに成功した。さらにジェンダーの観点から見ると、ミドルブラウ研究は、その初期研究者として知られる Nicola Humble が女性大衆文学に着目したことで有名なように、ジェンダー研究にも目配りがなされている。いわばミドルブラウ研究は、ハイブラウを中心に研究がなされてきたモダニズム文学研究の再考あるいは拡張だと言える。

しかし、ミドルブラウという女性大衆読者の視点からだけでは postfeminism の問題(第二波と現代フェミニズムの分断)は解消されず、むしろ女たちはハイブラウとミドルブラウに分断される可能性すらある。このような考えのもとに、本課題においては、20世紀初頭のイギリスの「使用人問題」に注目した。20世紀初頭は労働者階級女性にとっては政治的権利を獲得しただけでなく、職業上の変化があった時代でもある。それまでは中産階級の家庭の家事労働に従事していた労働者階級女性は、新たに創出された事務職へと職種変更していった。このことは他方で中産階級女性にも、従来は家事使用人がおこなっていた家事育児を自らがおこなわねばならないという変化をもたらした。このことに着目して、本課題においては、女性参政権達成後の女たちの共通課題として家事労働を理解して、次のように問いを再設定した。現代の「すべてをもつ」と20世紀初頭の使用人不在の中産階級女性たちには、自分たちの親世代とは異なる形で家事労働を想像するという意味で、共通の課題を抱えていたのではないか。つまり、労働者階級女性も中産階級女性もともに労働の変容によって新たな不安を抱えたのではないか。

上記のように問いを再設定したうえで、本課題では、参政権獲得以降の女たちの状況を、竹村和子が用いた「“ポスト”フェミニズム」という概念に倣って「ポストサフレジズム (postsuffragism)」と名づけて考察することにした。竹村は「女」という概念を問うフェミニズムはつねに過程の段階であり、その内実をつねに自己参照的に問いかけ続けるものだと説明する。また竹村は、フェミニズムとはつねになにかの後(ポスト)という生成過程であり、「ポスト」に自己参照的、自己批判的、自己増殖的という意を読み込む。つまり竹村の「“ポスト”」の引用符は、その語の持つ潜在的意味を読者に強調する意図を示している。竹村の論に基づきながらも、本研究では意味上の亀裂を回避させるため、postfeminism という表記を用いる Stephanie Genz と Benjamin Brabon に依拠して、引用符の記号なしの「ポストサフレジズム」という表記を用いる。「ポストサフレジズム」という言葉によって本論文が問うのは、第一波(参政権世代)から、第二波(ウーマン・リブ)との間には断絶はないのではないか、両者を断絶ではなく連続体として捉えるためにはどのような視点が必要なのか、ということである。

2. 研究の目的

本研究の当初の目的は、21世紀におけるポストフェミニズム状況を20世紀と接続させることによって、現代および20世紀初頭のイギリスのフェミニズム文学の再考を試みるものであった。本課題が提案するのは、第一波フェミニズムの終焉(1930年代)以降から現代までの時代にポストサフレジズム(イギリス女性参政権獲得の1928年以降)という名を与え、一連の継続する時代として捉えることである。モダニズム(1920-30年代)、冷戦(1945-1991)、新自由主義(1990年代から現代)の時代を包括的に理解することによって、イギリス女性文学のとくに社会主義運動の成功と失敗を系譜的、かつグローバルな現象として考察することを試みた。具体的には、英米日に読者をもつフェミニスト知識人作家 Virginia Woolf およびその作品をイギリスのフェミニズム文学の指標として参照しながら、Woolf の次世代の作家 (Vera Brittain など) の再考を目指した。これが研究当初の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 1年目については、資料収集および作品の読解を行うと同時に、The Modernist Studies in Asia Network で研究発表、日本英文学会の年次大会でシンポジウムおよび The 4th Japan-Korea International Virginia Woolf Conference のシンポジウムに登壇し、隣接分野の研究者との知見の共有・意見交換をおこなった。また、オンライン雑誌で記事2本および学会誌に研究論文1本を執筆した。さらに、イギリスから研究者を招き、講演会を開催した。

(2) 1年目の年度末以降、コロナ禍によって研究計画の変更を余儀なくされた。第一に、コロナ禍に加えて、病気という不測の事態が加わったため、研究代表者の海外渡航を断念することになった。第二に、海外から招聘予定だった研究者の日本への渡航の実現の見通しが一時期立たなくなり、結果として研究を1年延長することになった。

(3) 2年目については、コロナ禍を受けて研究課題の再検討が中心となった。まず、渡航による資料収集の見通しが立たないため、収集方法を見直し、海外渡航費として使用する予定だった費用を充当して、書籍として購入可能なものについては購入し、同時に、各地の図書館から複製可能なものは郵送して入手する方法に変更した。また、定期刊行物などの資料の現地収集が困難になったため、作品テキストの読解を中心におこなう方法に方針転換した。対面での研究会の代わりに、オンラインでの研究会を開催することにした。

(4) 3年目については、オンライン研究会を研究者仲間とともに定期的実施し、1年目に執筆した雑誌論文を発展させ、当初の計画にはなかった論文（「人びとの夢の世界を阻むもの、あるいは、21世紀のアール・デコ論のために」）を執筆した。後者では、イギリスの労働者階級女性研究で知られる歴史研究者 Selina Todd の *The People* を、トランスジェンダー排除言説の観点から批判的に読解した。これら二つの論文は、共編著者としてたずさわった論文集『アール・デコと英国モダニズム』として結実された。

(5) 研究を延長した4年目については、岡真理・後藤絵美編著の論集『記憶と記録にみる女性たちと百年』に論文を寄稿した。ここでは、第一次大戦の従軍経験を女性の視点から書いたことで著名な Vera Brittain の著作を、「すべてをもつ」の課題と接続させて論じた。また、イギリスのリーズ大学からの研究者を招聘した研究会を開催するとともに、劇作家で小説家の石原燃氏の講演会を早稲田大学ジェンダー研究所と共催した。さらに、Kate Moore の *Radium Girls* の翻訳作業をおこなったが、これについては2023年度に刊行される。

4. 研究成果

研究初年度には、日本で開催された国際学会および全国学会に登壇し、日本全国、また欧州だけでなくアジアの研究者と意見交換をおこない、海外の研究動向を知ることができた。同時に、英国のモダニズム文学(Virginia Woolf)を産業との観点から再読した研究論文を発表した。二年目はコロナ禍の対応に終始したものの、三年目および四年目には、同時代に起きているトランスジェンダー排除言説とモダニズム/モダニティの問題と接続させて論じるとともに、モダニズム文学の枠組みでは論じられることがほぼなかった Vera Brittain の作品を postfeminism およびモダニズム/モダニティの問題に接続させて議論することができた。こうした一連の成果の一部は修正の後に、博士論文の一部として提出された。

さらに上記の学術上の研究成果の副産物として、オンライン誌（「ありのままで」、「ボランティア」）での項目や、戯曲作品（ルーシー・カークウッド『ザ・ウェルキン』）の解説などを執筆することができた。とくに後者については、出産・妊娠をテーマにした作品であったことから、ポストフェミニズムとリプロダクションについて考察することにつながった。さらに、そこから現代日本のリプロダクションの状況を描いた劇作家の石原燃氏のテーマとつながり、早稲田大学ジェンダー研究所との共催で同氏の講演会を開催することができた。

全体としては、コロナ禍等の不測の事態により、海外での定期刊行物などの一次資料の収集は実現することができなかったが、オンライン会議の普及によって、新たな形での研究活動が実現することとなり、論文集および博士論文という形で成果を出すことができた。

これら一連の成果すべて、科学研究費助成金なくして、またコロナ禍にもかかわらず資料を調達してくれた勤務先および国内外の図書館司書の方々の協力なくして達成することはできなかった。関係者の支援に心より感謝している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松永典子	4. 巻 36
2. 論文標題 英国アール・デコ時代のシスターフッドの夢：フェミニストのインフラと斜塔作家のモノ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヴァージニア・ウルフ研究	6. 最初と最後の頁 121-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松永典子	4. 巻 4月号
2. 論文標題 ありのままで	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究社WEBマガジンLingua：文化と社会を読むキーワード辞典reboot（リレー連載）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松永典子	4. 巻 1月号
2. 論文標題 ボランティア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究社WEBマガジンLingua：文化と社会を読むキーワード辞典reboot（リレー連載）	6. 最初と最後の頁 na
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松永典子	4. 巻 2019
2. 論文標題 ふつうのフェミニスト？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第91回大会（2019年度）Proceedings	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 松永典子
2. 発表標題 ふつうのフェミニスト？
3. 学会等名 日本英文学会第91回全国大会シンポジウム第四部門「Literature is Ordinary? : 20世紀の英文学と ふつうの人びと 」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Matsunaga
2. 発表標題 Feminist Temporalities and Modernism: Remapping Virginia Woolf 's 'Works'
3. 学会等名 The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) Second International Conference: Modernism and Multiple Temporalities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Matsunaga
2. 発表標題 Reading English Literature and Feminism in Japan in the #MeToo Era Angry Young Women in Shelagh Delaney 's A Taste of Honey
3. 学会等名 The 4th Japan-Korea International Virginia Woolf Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 菊池 かわり、松永 典子、齋藤 一、大田 信良	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 アール・デコと英国モダニズム	

1. 著者名 長沢 栄治、岡 真理、後藤 絵美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 296
3. 書名 記憶と記録にみる女性たちと百年	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 吉野亜矢子氏(University of Leeds)講演会2000年代少女小説におけるヴィクトリア朝 ヴィクトリアン・ローズ・テイラーシリーズと家の束縛	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 石原燃さんと語るフェミニズムと中絶(早稲田大学ジェンダー研究所と共催)	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------